

福岡大学先端経済研究センター ワーキング・ペーパーシリーズ

大江匡房「参安楽寺詩」に見る現太宰府天満宮の初期経済基盤

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2021-011



福岡大学先端経済研究センター

〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19番1号

大江匡房「参安楽寺詩」に見る現太宰府天満宮の初期経済基盤

山崎 好裕

概要

現在、太宰府天満宮と呼ばれている九州北部に位置する神社は、菅原道真の死から間もない設立当初は安楽寺と呼ばれる寺院であった。安楽寺は菅原氏の私的な寺院として出発しながらも、北部九州を代表する霊地として発展していくことになる。この発展の背後には、間違いなく経済基盤の確保があった。そのきっかけは道真の玄孫・菅原輔正の太宰府政庁への赴任である。彼によって、安楽寺発展の基盤が築かれた。都の貴族層から多くの寺領の寄進があったことも、もちろん、経済基盤の強化につながった。これには純粋に信仰上の要因の他に、対中貿易からの利権を手にしようという思惑も多分に働いている。やがて、時代を代表する学者・文人の一人であった大江正房が大宰府政庁に赴任することになる。彼は現地での4年の間に、安楽寺を主題とした長大な詩「参安楽寺詩」を作成した。これは都の貴族たちに安楽寺の情報を遍く伝えるとともに、文学作品としてのすばらしさ故に、安楽寺の権威を大いに高めた。そうした文学的成功は、それ自体、安楽寺の権威確立の完成であり、また、翻って経済基盤の強化にも繋がった。

JEL 分類番号：B110, N450, N550。

キーワード：「参安楽寺詩」、大江匡房、経済基盤、外国貿易、寺領。

Masafusa Oe's Poem 'Visiting Anrakuji Temple' and Dazaifu-Tenmangu Shrine's Early Economic Foundation

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

Dazaifu Tenman-gu Shrine, which is located in the northern part of Kyushu Island, used to be a temple called Anrakuji when it was built just after Michizane Sugawara's death. This temple developed as one of the most famous sites for prayer. In the background of this development, there was an economic foundation. Sukemasa Sugawara, who was a great-great grandson, took office in Dazaifu Government. This caused the early development of Anrakuji Temple. After this assignment, many noblemen in the capital donated manors to the temple. These donations were caused not only by religious reasons but also by desires for actual profit from foreign trade. One hundred years later, Masafusa Oe, a representative scholar and poet, took office in Dazaifu Government. He made a very long poem 'Visiting Anrakuji Temple' during his four-year stay in the office. This excellent poem informed noblemen in the capital of the temple and increased its authority. A literary success of this poem completed the establishment of the temple's authority and also enforced its economic foundation again.

JEL classifications: B110, N450, N550.

Keywords: 'Visiting Anrakuji Temple', Masafusa Oe, economic foundation, foreign trade, manors.

はじめに

筆者は経済学者でもあり、宗教学者でもあることから、臨界領域の対象について宗教経済論的アプローチを提唱している。宗教経済論的アプローチについて、宗教的言説の展開の背後で、社寺の経済基盤がどのように構築されていたかという点を解明する手法と、筆者自身は定義している。とは言っても、経済決定論のように一対一で経済と教義を対応させようというのではなく、宗教現象への影響要因の一つとして、宗教活動を展開する主体の経済基盤を捉えるものであることには注意してほしい。

本稿で取り上げるのは、現太宰府天満宮の初期の経済基盤である。周知のように太宰府天満宮の社号は近年のものであり、菅原道真の霊廟として建設された当初は安楽寺であった。まず、この安楽寺の成立を年代記的に把握することから本稿を始める。その後に、安楽寺の経済基盤を掘り下げていくのだが、もちろん、それらの第一のものは寺領の存在である。だが、宗教施設である以上、信仰の広がりや参詣者の増加もまた、その存立基盤を支える決定的な要因であることは言うまでもない。とりわけ、創建時の平安時代にあつては、都の貴族層の崇拜をいかに集めるかは死活的に重要であった。

安楽寺の寺領と信仰の双方に大きく貢献した人物として大江匡房をあげることに、異を唱える人はいないだろう。優れた教養人である匡房が詠んだ「参安楽寺詩」が、安楽寺の経済基盤を考える上でも重要であるという論点は、本稿の中心的な問題提起であると言っている。本稿の最後に、「参安楽寺詩」の内容を解析して、匡房がこの詩に担わせた役割を推測したい。また、詩の白文と書き下し文を附録として末尾に添付した。

1. 安楽寺の沿革と菅原家

菅原道真は延喜 3 (903) 年、今の榎社の場所にあった館で逝去した。その墓所には間もなく安楽寺が建立され、天曆元 (947) 年には別当として道真の孫・平忠が赴任した。平忠は道真の子で文章博士であった淳茂の子である。別当はその後も、2 代鎮延、3 代遍日と、いずれも道真の孫たちに受け継がれていく。¹つまり、安楽寺は当初、菅原家の私的な氏寺の性格が強かった。

安楽寺の地位を高め、その経済基盤を強化する契機となったのは、道真の玄孫にあたる菅原輔正が太宰大貳として、天元 4 (981) 年に現地に赴任してきたことである。永観 2 (983) 年、この輔正に道真の神託が下った。輔正は神託に従い、太宰政庁を離れるまでの 3 年間で、多宝塔と廻廊を造営し、法華経 1000 部を写経して納めている。また、輔正に近かった円融天皇は常行堂と宝塔院を建立するとともに、肥前小倉庄 56 町を寺領として寄進した。

¹ 片山 (1955)、37 ページ。

神となった道真の神号であるが、永延 2 (988) 年、北野で勅祭が挙行されたとき、天満自在天神が初めて登場した。天満は道真の神格特有であるが、自在は他化自在天を指す。他化自在天とは、三界のうちいちばん下である欲界のいちばん上にある第六天のことである。ここには魔王波旬が住むとされるので、天満自在天神の神号は、道真が魔王と一体化したことを意味している。³さらに、正暦 4 (993) 年、朝廷が道真に第一位太政大臣を追贈することで神位は極まった。

なお、現在確認できる南北朝期第 36 世までの安楽寺別当について下に記す。⁴

初代平忠(道真孫)→2代鎮延(道真孫)→3代遍日(道真孫)→4代松寿→5代祥全(輔正弟)→6代元真(文時子)→7代安果(元真兄)→8代聖豪→9代任算(幹正子)→10代増守(為紀子)→11代安円(増守甥)→12代基円(孝標子)→13代定快(孝標孫)→14代信永(在良子)→15代俊源(信永弟)→16代俊永(信永弟)→17代聖教→18代善昇(善弘子)→19代慶宗(在良孫)→20代全珍(在良孫)→21代安能(在長子)→22代良雲(在寛子)→23代珍永→24代定円(定忠子)→25代長円→26代義慶(義高子)→27代長快→28代長宗→29代公禪(在輔子)→30代定信→31代長済→32代長照→33代堯覚(公業子)→34代長玄→35代慶円(国高子)→36代経円(慶円従兄弟)

2. 安楽寺領の拡大

安楽寺領の拡大は、自力での開墾によるものではなく、全て貴族層からの寄進によってなされた。以下に、寄進された年と庄名、寄進者を表として示す。⁵

延喜 19 (919) 年	粕屋小中庄	
天徳 2 (958) 年	穂波土師庄	太宰大弐・小野好古
天徳 4 (960) 年	筑後櫛原庄	太宰大監・紀有頼
応和 2 (962) 年	粕屋酒殿庄	太宰大弐・小野好古
康保元 (964) 年	筑後高樋庄	太宰大弐・藤原佐忠
天禄元 (970) 年	壱岐中浜庄	
天禄元 (970) 年	壱岐島分庄	

² 同上。

³ 関東地方には、第六天神社が多く分布している。

⁴ 恵良 (1967)、87 ページ。

⁵ 片山、前掲論文、38 ページ。

永観2(984)年	肥前小倉庄	円融天皇
寛和2(986)年	筑前栗田庄	太宰府政庁
正暦4(998)年	筑後綾野庄	一条天皇
長保3(1001)年	筑前博多庄	一条天皇
長保3(1001)年	筑前大浦寺庄	一条天皇
長和4(1015)年	筑前安志岐庄	
治安3(1023)年	筑後飯得庄	太宰大弐・藤原惟憲
万寿4(1027)年	肥後玉名庄	太宰大弐・藤原惟憲
長元5(1032)年	豊後大肥庄	後一条天皇
寛徳2(1045)年	筑後楽得別符	太宰権帥・藤原経通
永承2(1047)年	筑後下妻庄	
永承2(1047)年	豊前副田庄	
永承2(1047)年	肥前神辺庄	
康平元(1058)年	日向吉田庄	
永保2(1082)年	肥前佐嘉庄	
永保2(1082)年	肥前蠣久庄	
永保2(1082)年	筑前長尾庄	
永保3(1083)年	肥前鳥栖庄	
永保3(1083)年	肥前幸津庄	
永保3(1083)年	肥前石動庄	
永保3(1083)年	筑後長田庄	
永保3(1083)年	肥前唐津庄	肥前国司
康和3(1101)年	筑前桑原庄	太宰権帥・大江匡房
康和3(1101)年	筑後田嶋庄	
康和3(1101)年	本木別符	
承安3(1173)年	肥前牛嶋庄	

距離的にも近く、安楽寺までの交通路も整備された筑前、筑後、肥前といった地域の寺領が多い。しかし、北部九州一円だけでなく、遠くは日向にも点在していることがわかる。

注目すべきは、11世紀初に一条天皇から寄進を受けた博多庄と大浦寺領である。博多庄は那珂川、大浦寺庄は多々良川の河口地域を意味していると考えられるが、どちらも外国貿易の拠点であったことが重要である。藤原惟憲は自ら希望して太宰大弐となって赴任したが、この地で外国貿易を行うことが目的であった。肥前国司が唐津庄を寄進していることや、壱岐島にも寺領を有していたことから、安楽寺が外国貿易において重要な役割を果たして

いたことが推測できるのではないだろうか。⁶

3. 安楽寺と大江匡房

大江匡房は白川院政期に学者・官僚として活躍した。本人が『暮年記』という自伝を執筆していることから、その人生を詳細に知ることができる。同書によると、匡房は4歳から漢籍を読み始め、8歳で『史記』と『漢書』を読破した。11歳で初めて詩を作って神童と呼ばれ、宇治関白藤原頼通から必ず位人臣を極めるだろうと評された。16歳で作った「秋日閑居賦」が大学頭藤原明衡に認められた。大納言源経信は自分を引き立ててくれ、彼の下で自分は昇進を遂げた。最近是我的詩文を認め、感激してくれた人々が亡くなっているのが悲しい。⁷

自伝はここで終わっているが、当時権中納言だった匡房は、前任者の源経信が亡くなったため、永長2(1097)年、太宰権帥を兼任することになった。翌承徳2(1098)年9月、匡房は九州へ下向する。康和4(1102)年正月に権帥を辞し、6月に帰洛している。大宰府にいた期間は4年であった。⁸

匡房は大宰府滞在中、しばしば曲水の宴を催した。康和4(1102)年3月3日の曲水の宴では、匡房の歌に神が感応して殿舎が鳴動したと伝わる。⁹実際、大宰府にあった4年間は匡房の文学活動が多産を極めた時期である。本稿で取り上げる「参安楽寺詩」は康和2(1100)年8月に賦されている。¹⁰帰洛後の天永2(1111)年7月末に大蔵卿に任じられた匡房であったが、同年11月初め、在官のまま逝去した。¹¹

4. 「参安楽寺詩」の解明

参詣の日付から始まる「参安楽寺詩」は、匡房自身の歩みに沿って情景が進んでいく。金文字の扁額の掛けられた門を過ぎると、三つの池が見えてくる。池の水は澄み、翡翠のような色が美しい。水鳥と戯れながら道を進み、太鼓橋を渡ると池の岸辺は白い砂に覆われてい

⁶ 公式な遣唐使船の派遣は他ならぬ道真自身により廃止されており、大宰府政庁の現地官僚による私貿易が半ば公然と行われていたものと考えられる。

⁷ 佐藤(1994)、74-75ページ。

⁸ 同上、76ページ。

⁹ 同上、77ページ。

¹⁰ 同上、83ページ。

¹¹ 同上、79ページ。

る。

北には山が聳えるが、山内には野鳥や兎がいるであろう。西には川があって、清冽な水が流れている。寺の庭には様々な樹木が植えられている。梅の花の香りも高い。果樹は色とりどりに枝に実っている。

秋なので樹木の葉が散っている。籬には菊の花が咲く。蔦や蔓は木々に絡みついて龍のようにも見える。文人墨客を迎える殿舎がたくさん経っている。法華堂に祀られた九品仏は西方におわすと言う。ここに祀られた菅原道真は生前質素を好んだというが、後代の人々がこの寺を飾って煌びやかとなった。

神徳は速やかに感得される。境内には広く多くの地域から参詣の人々が集まってくる。神であるからと犠牲を捧げる必要はない。ここは寺院であり、殺生は固く禁じられている。

本朝は帝の聖恩が遍くいきわたり、民は飢えに苦しむこともない。君子の言が実行されて神威も行き渡っている。農民も工人も利益をあげ、商人も盛んに財貨を売買している。殷や周に劣らない繁栄ぶりである。文化は周王朝に同じく、言説は孔子のようだ。多くの名文が書かれ、たくさんの書物が積み上げられている。

吉祥の地を選んで祠を建てて万代に祀る。鼎を置いて神を祀り、煌びやかな柵を周囲に巡らす。この地の南の峰には昔高僧がいて、入定して金色に輝く仏となったと言う。また、大威徳明王が降臨して麗しい姿を示したそうだ。

かつて、道真公を巡る疑獄があり、調査が行われた。もし偽りを言って陥れた人がいるならば、真実を暴くのに何の遠慮が要ろうか。今寺では年を通じて様々な行事が行われている。正月3日の曲水の宴、七夕の漢水の儀式、年2回の勸学会、秋の念仏など。仏はその厳かな姿を示し、僧たちは学問談議に余念がない。神への祈りも行われ、晴れを祈れば良い天気が続く、降水を祈れば雨は忽ち降る。

我が朝では五畿七道、いずれの国でも神を祀っている。我が天満自在天神の名も遍く人々に知らしめようではないか。その神徳のお蔭でこの筑紫の国は富み栄え、鳥も穀物を啄んでいる。子どもたちも皆飴を口に含むことができる。

さて、私とは言えば、天に祈り、人の道を踏み外さぬように生きてきた。身を神に委ねて、弛まず善を行ってきた。人生のなかで自分が楽しむことは少なかったが、政事では内心忸怩たる思いもある。そんな私も62歳となり、すっかり老いた。鏡を見ては白髪頭を嘆いている。今はただ、この2千字の詩を作り、ただ、文人仲間に笑われるのを恐れるのみである。

さて、上記の内容の長大な「参安楽寺詩」はどのような意義を持っているのだろうか。

第1に、これが安楽寺を主題とした最初の文学作品であるということが重要である。新たに九州の地に建てられたこの寺院の権威を高めるためには、それが優れた文学作品に表されていなければならない。これは都の貴族層が当時の文化人階級であったためである。匡房の作詩の目的のもここにあったことであろう。

第2に、詩の内容によって多くの情報を都の貴族たちに伝えている。境内の情景や美しい景観、寺の繁栄と興隆の状況、さらに、大いなる神徳などである。これを読んだ都の貴族

たちは、神威にあやかるとして寺領を寄進したり、金品を奉納したりすることが促されたであろう。

匡房が大宰府に赴任したのは、世話になった前任者の死という偶然の結果であったが、相当程度に意図的に安楽寺の発展のために手を打ったのだと言える。その根本には、同じ学者・文人としての道真に対する匡房の深い敬愛の念があったことを、誰も否定できないだろう。

おわりに

菅原道真の墓の上に建設された廟を中心とする安楽寺の発展の契機となったのは、天 元 4 (981) 年、玄孫・菅原輔正が太宰大貳として現地に赴任したことであった。彼の手によって、堂宇が整備されて安楽寺大発展の礎が築かれる。

その後、何十年かに渡って、都との貴族たちからの事業の寄進が相次いだ。その背景には、外国貿易の利益に与ろうとする実利目的もあったものと思われる。すなわち、道真自身による遣唐使の廃止以降、公的な意味での中国物産の輸入が途絶えていたが、貴族層にはそれら文物への旺盛な需要があった。大宰府の現地在官たちが私貿易に従事するにしても、安楽寺の宗教的権威を背景にすることは大いに意味があったはずである。

永長 2 (1097) 年に太宰権帥として赴任した大江正房が行ったのは、これらの発展を集大成して、筑紫の地の霊地としての揺るぎない権威を確立することであった。その目的のために彼が作ったのが「参安楽寺詩」であった。都の貴族層に依存する安楽寺の経済基盤の完成という意味でも、この文学作品は極めて大きな役割を果たしたと推測される。

【参照文献】

恵良宏「太宰府安楽寺の寺官機構について」『宇部工業高等専門学校研究報告』第 6 号、79 - 87 ページ、1967 年。

片山直義「古代末期における安楽寺領」『福岡学芸大学紀要』第 5 号第 1 部文化系統、37 - 41 ページ、1955 年。

佐藤道生「『暮年記』の執筆時期」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第 65 巻、73 - 83 ページ、1994 年。

太宰府市史編集委員会『太宰府市史 文芸資料編』太宰府市、2002 年。

〔参安楽寺詩〕白文¹²

康和二年秋 清涼八月時 我詣安楽寺 寺在東北陲 出府七八里 先望彼門楣 題額構金字 下乘当路岐 地隆尤踴敞 道遠方透蛇 門外及廟前 往々有三池 其水潔如珠 看之高自涯 以展青翡翠 如敷碧瑠璃 波心風疊皺 潭面月生規 菰蒲早穗秀 菡萏晚藥遺 分浦驚鴛鴦 近岸戲鷺鷥 鶴子毛淋滲 鳧鳥¹³衣襪襪 鴻鴈鸕鷀屬 相通引雄雌 常樂我淨声 曉夕常在茲 鷁舟維古岸 虹橋照漣漪 一踏銀沙浦 再休白玉陂 北有崔嵬山 煙嵐暗懸倚 嶺高銜銀兔 谷深藏黃鸝 西有潺湲水 霧雨添彎崎 或激為飛灘 或舖為清涓 危石累八九 冷滑剗且鼓 莓苔似花牋 周道平如弓¹⁴ 軒騎若喧譁 卒然忽致迫¹⁵ 庭前多佳樹 森々幾叢枝 梅含雞舌香 上陽紅鯉垂 近在遙階下 芬馥似瓊靡 暮雨變楓桂 曉風吹棠梨 左右色漠々 次第影熙々 啼鳥時一声 聞之似涼颼 橘迷懸金鈴 柿猶列烏棹 山菓百千種 夾道正離々 甘酸味非一 殆近于荔芝 楸栢葉翻扇 楊柳枝交絲 涼氣飄仙桂 爽籟誠高椅 秋來木葉下 散漫塞古廡 纈纈敗爛然 錦繡寒凄其 或有賢貞樹 巖崿多厥麗 或有凋零梢 林頂自疲衰 地幽洞未素 天暄苑難萎 階除尋芳草 十步方葳蕤 結趺含露蘭 衛足向陽葵 苔庭養蓀蕙 沙場植苙薜 夏萱衰北堂 時菊綻東籬 蕨生改人拳 茗老失鷹觜 黃碣死已久 誰人採紫芝 脩竹乱無行 四時常猗々 日月光不透 清陰足相迫 広柱有蔦蘿 滋蔓輕青滋 根一條且千 滿室自支持 下降藏礎石 上昇掩花榭 宛轉類苙瓜¹⁶ 屈蟠訝龍螭 綠羸綺羅舒 黃葉珪璋施 檐宇旁縈紆 梁棟併離纏 造物者何意 強貽此幽奇 華堂連柳榭 輪奐自參差 廊扉排瓊戶 離刻幾縈¹⁷ 懸鏡透珠簾 交壁飾縹瓷 門塾安木梗 挾箭共哆嗚 瞻視偏如生 跋扈勢疑々 廟壁凶華客 操筆皆候伺 鬢髮誠如尽 儼雅容孜々 有堂号法華 草創託巽維 九品安西方 十願坐中遠 護持仏法天 当左亦相比 伝聞我聖靈 毎日念編蝨 葷膾敢不入 窈窕豈得窺 本願好儉素 雖志在茅茨 後代加華飾 莫物非瓊琪 神以甚揭焉 靈驗不可訾 如在同平生 夢想叶思惟 感応在須臾 遄自駟馬馳 冥刀震蛮貊 潜化及童子 粉楡惟紙錢 松杉飽琛縈 金埒当門前 逐重競青驪 嘶來古栢暗 連錢醉難騎 聚珎極青蛟 潔幣奉束紼 豈唯州郡人 梯航貢土宜 稽首傾貂蟬 弓¹⁸頭衝鳥¹⁹鷄 殺生深所禁 豈敢求三犧 置酒嫌淮泗 断肉誠門垣 施潛衛以降 吾土固大治 一境為泰平 九州因清夷 緣底愁病蚕 誰敢食蹲鴟 黔

¹² 太宰府市史編集委員会（2002）、303-314 ページ。

¹³ 鳥の左にヨを二つ重ねた漢字。

¹⁴ いしへんが付く。

¹⁵ あめかんむりが付く。

¹⁶ 瓜の右に矢という漢字。

¹⁷ さらに右にふるとり。

¹⁸ にんべんが付く。

¹⁹ 左は山ル夕。

首富秋稼 蒼生休調飢 宜驗夫子言 善政不頁²⁰期 戎罷家呆²¹弓 戈止人藏施²² 有慶兆
 民頼 莫不蒙庖褓²³ 延算均北辰 頒沢等南箕 神力籠宇宙 山谷独可移 尊重三蜜法
 還為扶桑資 辰²⁴子忘四愁 梁鴻息五噫 農工保利益 商賈全質劑 昔是三台位 兼又二
 朝師 殷夢通巖穴 周獲非熊羆 舟戢²⁵塩梅材 秉政編臯伊 輸忠輔皇漢 尽節佐帝為²⁶
 諫諍曜軒日 啓沃昭堯曦 淳化同姬旦 聖道垂仲尼 羽林為上將 象岳作台司 風月応本
 主 経籍即尊戸 抑亦長衆芸 百中嘲南皮 博覧先世伝 佳句百代知 春蛙無氣序 如海
 岸出篩 秋鴈数行什 似冰雪在肌 閑居催粧製 深自騷人辞 煙霞桃李句 絶於曹娥碑
 文章十二卷 併為瑠璠貨 後集動三才 読者涙漣洏 異日化仙訣 斯処留龍輻 雲台奏宣
 年 民蒙考妣慈 爰占九泉地 長立万代祠 三廻加金冊 百行記鼎彝 朝使伝鳳銜 玉藻
 飛前墀 如無脛而來 不待微風吹 青苔色紙上 妙迹両韻詩 伝在門下扃 後人猶得窺
 風人献龍章 日夜顕尊儀 吟詠閑引歩 聴者垂娵縻 又聞紅燭燃 殆欲及簾帷 有声暗喚
 人 既免炎上危 昔有南峯僧 入定見金姿 大聖威徳天 昭臨侔二麗 率百万猛靈 主億
 千靈祇 皇居頻有火 製造課班垂²⁷ 虫成卅一字 板上著其詞 夜々管弦声 寥亮座下玠
 時々蘭麝香 芬芳室中胎 怪同宋宮戸 読齊宣室釐 綿山徒製屐 羅水未歡醜 葉欄石徒
 煎 仙竈玉空炊 国内有疑獄 真偽迷多疑 書理押寺門 一旦弁妍嗤²⁸ 解紛超神軍 兪
 蒙過元龜 囚徒寛五刑 訟人免百罹 凶邪無得所 自兼三不欺 若人有詐偽 誅罰豈有私
 若人有隱伏 兪揚更無遲 懲咎立可見 福禍坐応推 鶯鳥駟鳥雀 仁獸逐狐狸 霜科決鎗
 銖 露臧毫釐 寒朝参詣輩 駕肩手成弓²⁹ 暑月精進人 繼踵足忘疵 宴遊為幾廻 篇翰
 各手随 早春和菜羹 初冬残花墮 三日曲江宴 七夕漢水嬉 二季勸学会 結縁極素縑
 九秋念仏筵 利生待僧祇 聖忌是何日 与花有春期 仲秋二十五 齋会長無虧 楽懸四時
 張 琴瑟和埙篪 酒部七節立 流醴泛瓊卮 箏柱吹霞窓 歌塵動雲榭 簫管吹不尽 曲長
 紅袖羸 舞衣續紛翻 宴罷伏燕姬 堂塔皆櫛比 三昧伝月氏 常擊大法鼓 久挑伝灯脂
 無明蕩妄想 夢後驚軋維 仏表万徳容 僧垂八字眉 論議常往復 講説自疇咨 龍象満其
 中 師跡伝陳隋 証入位弥深 廻向志各摛 都邑成其下 弓³⁰屋連栴檀 城狐社鼠喻 有

²⁰ さんずいが付く。

²¹ 上に青の上の部分。

²² かねへんが付く。

²³ 本当はしめすへん。

²⁴ 左に方。

²⁵ てへんが付く。

²⁶ おんなへんが付く。

²⁷ にんべんが付く。

²⁸ くちへんなし。

²⁹ にくづきが付く。

³⁰ にんべんが付く。

罪免鞭答 震居西北野 尊神祐広基 右近馬場辺 風景任天為 万乘廻鸞興 六軍靡龍旗
 羽客曜鶴綾 宮女曳鳳綦 紫衫各行事 袞服方樹頤 林巒生光輝 百玉鴻業丕 公家有神
 事 奉幣先祈祺 禱晴日皓々 乞沢雨祁々 又有吉祥院 在子午城离 孟冬十七日 八
 講法華披 杏壇柳市生 集会何堂之 薦拳遂無謬 禁制敢不隳 五畿及七道 每国祭祀弓
 31 都慮四海内 争不仰指搗 天満自在名 布護被尊卑 神慮所擁護 枯楊忽生莢 神德
 所眷顧 洞池自生澌 大得飽菽麦 燕豈浪蒺藜 普天悉有截 率土誠不羈 傳六十
 余州 返於彼八廩 国富鳥食糗 民安孫含飴 冥化少傾欠 神德多所禱 菜色満上腴 花
 祖尽東亩³² 余裔為著姓 青紫事農義 棘路夙夜念 蘭省簪帶疲 射荣及十葉 分符豈一
 麾 廊下鑑往事 旧実尤可思 仰天恃有道 与善冥憐台 任神更無倦 福謙亦在誰 乖和
 身多恙 抱節年已耆 沈病寡歡娛 臨政多忸怩 行年盈六十 釐務事々癡 披籙卜露命
 对鏡抽霜髭 脆質同蒲柳 落景及崦嵫 適題二千字 恐招梧台嗤

「安楽寺に参るの詩」読み下し文³³

康和二年の秋 清涼八月の関 我安楽寺に詣ず 寺は東北の陞^{ほとり}にあり 府を出づること七
 八里 先ず彼の門楣を望む 題額は金字を構^{かま}る 下乗して路岐に当たる 地隆く尤も顕敞
 たり 道は遠方に透蛇^いたり 門外廟前に及び 往々三池有り 其水潔きこと珠の如し 之
 を看るに涯^よ自り高し 青翡翠を展ぶるに以て 碧瑠璃を敷くが如し 波心に風皺を畳み
 潭面に月は規を生ず 菰蒲は早穂秀でて 函^{なみち}宮^{すい}に晩藥遣^する 浦を分きて鷺鷥^{あしどり}を驚かし 岸
 に近づきて鷺鷥と戯る 鶴子の毛は淋滲にして 鳧^う鳥³⁴の衣は襤褸^{りし}たり 鴻鴈^{こうがん}鸕鷀^{へまき}の属
 相^{かは}通りて雄雌を引く 常に我浄声を楽しみ 暁夕常に茲在り 鷓^{げま}舟古岸に維ぎ 虹橋漣^い漪
 を照らす 銀沙の浦を一踏し 再び白玉の^{つつみ}陂に休む 北に崔嵬^{けい}の山有り 煙嵐暗く^ま碕^きに懸

31 ころもへんが付く。

32 くさかんむりが付く。

33 筆者読み下す。

34 鳥の左にヨを二つ重ねた漢字。

かる 嶺高く銀兎を銜み 谷深く黄鸝を蔵す 西に潺湲の水有り 霧雨彎崎に添ふ 或は
 激して飛灘と為り 或は舗きて清渥と為る 危石八九を累ね 冷滑にして刃られ且つ敲だ
 つ 莓苔は花牋に似て 周道平らかにして^て弓³⁵の如し 軒騎喧譁の若くして 卒然として
 忽ち追³⁶を致す 庭前に佳樹多し 森々たる幾叢の枝 梅は雞舌の香を含み 上陽に紅鯉
 垂る 近く在る遙階の下 芬馥として瓊靡に似たり 暮雨楓桂を交じ 曉風棠梨を吹く
 左右の色漠々として 次第に影熙々たり 啼鳥時に一声 之を聞くに涼颺似たり 橘迷ひ
 て金鈴を懸け 柿猶し烏桺に列す 山菓は百千種 道を夾みて正に離々たり 甘酸の味一
 に非ず 殆ど荔苴に近し 楸梧の葉扇と翻り 楊柳の枝絲に交ず 涼気仙桂を^{ひるがへ}飄し 爽
 籟高椅を誠とす 秋来たりて木葉下り 散漫に古堦を塞ぐ 纈纈爛然を取れ 錦繡其れを
 寒凄さす 或は賢貞たる樹有り 巖壑多く厥麗たり 或は凋零たる梢有り 林頂自ら疲衰
 す 地は幽洞にして未だ素ならず 天は暄菀にして萎孃難し 階除芳草を尋ぬるに 十步
 方に^{いづい}葳蕤たり 結跣し露蘭を含み 足を衛して陽葵を向く 苔庭に蕙蓀を養ひ 沙場に苳
 離を植う 夏萱北堂に衰へ 時菊東籬に綻ぶ 蕨生みて人拳を改め 茗老みて鷹觜失ふ
 黄碯死して已に久しく 誰が人紫芝を採らむ 脩竹乱れて行無く 四時常に猗々たり 日
 月の光透らず 清陰足りて相ひ追ふ 広柱に^{つな}蔦蘿有り 滋蔓して青滋を軽んず 根一條に
 して且つ千 満室自ら支持す 下降して礎石を蔵し 上昇して花檜を掩ふ 宛転して^{てつ}瓜
³⁷に類し 屈蟠龍螭かと訝しむ 緑囀の綺羅舒やかにして 黄葉の珪璋施す 檐宇の旁ら
 縈紆たりて 梁棟併せ離纏たり 造物者何の意にて 強ひて此の幽奇を^{のこ}貽せるか 華堂柳

³⁵ いしへんが付く。

³⁶ あめかんむりが付く。

³⁷ 瓜の右に矢という漢字。

樹を連ね 輪奐自ら参差たり 廊扉瓊戸を排し 離刻幾ばくか縹纒たり 懸鏡は珠簾を透
かし 交壁は縹瓷を飾る 門塾は木梗を安んじ 挟箭は共に哆嗚たり 瞻視偏へに生る
が如く 跋扈の勢ひ疑々たり 廟壁は華客を図り 筆を操りて皆候伺す 鬢髮誠に尽くる
が如く 儼雅たる容孜々たり 堂有りて法華と号し 草創巽維に託す 九品は西方に安ん
じ 十願中^{によう}遶に坐す 仏法天に護持し 左に当たり亦た相比す 伝へ聞く我が聖霊 毎日
編^{いん}蠶を念ず 葷^{くんだん}臚敢へて入らず 窈窕豈に窺ふを得んや 本願儉素を好み 志は茅茨に在
りと雖も 後代華飾を加へ 物として瓊琪に非ざるは莫し 神以て甚だ掲げ 靈^{えい}驗^{げん}誓るべ
からず 在るが如きこと平生に同じくして 夢想思惟に叶う 感応須臾に在り 駟馬の馳
せるより遄し 冥刀蛮貊を震し 潜化童子に及ぶ 粉^{ふん}榆^ゆ惟れ紙^し錢^{せん} 松杉琛^{ちん}縑^{せん}に飽く 金埒
門前に当たり 逐り重ねて青驪^りを競ふ 嘶き来りて古栢暗く 連^{れん}錢^{せん}醉ひて騎り難し 聚^く瓊
青蛟^{むちう}を極^{ごく}ち 潔幣束^{しやく}紼^{ふく}を奉る 豈に唯だ州郡の人 梯航土宜を貢ぐ 稽首して貂^{ちよう}蟬^{せん}を傾
け 弓^{きう}³⁸頭して鳥^{ちう}³⁹鸚^{ぱん}を衝く 殺生は深く禁ずる所 豈に敢へて三^{さん}犧^{かひ}を求めんや 酒を置き
淮^{わい}泗^しを嫌ひ 肉を断ち門^{もん}垣^{げん}を誡む 潜衛を施して以降 吾が土固より大治す 一境為に泰
平たりて 九州因りて清夷たり 底に縁り病蚕を愁ふるも 誰か敢へて蹲^{とん}鴟^しを食さむ 黔^{けん}
首秋稼に富み 蒼生調飢を休む 宜しく驗^{けん}ずべし夫子の言 善政期を貞^{てい}⁴⁰たず 戎罷の家
弓^{きう}を^{ふくろに}⁴¹ 杲^{こう}し 戈止の人^ご施^し⁴²を蔵す 慶有りて兆民頼り 彪^{ひょう}褌^{こん}⁴³を蒙らざる莫し 算を延べ

³⁸ にんべんが付く。

³⁹ 左は山ル夕。

⁴⁰ さんずいが付く。

⁴¹ 上に青の上の部分。

⁴² かねへんが付く。

⁴³ 本当はしめすへん。

北辰を均しくし 沢を頌ち南箕を等しくす 神力宇宙に籠り 山谷独り移るべし 三蜜の
法を尊重し 還りて扶桑の資と為す 辰⁴⁴子は四愁を忘れ 梁鴻は五噫を息す 農工は利
益を保ち 商賈は質劑を全うす 昔是れ三台の位にして 兼ねて又二朝の師たり 殷夢巖
穴に通じ 周獲は熊羆に非ず 舟戢⁴⁵塩梅の材 政を乗るに皐伊ほど褊し 忠を輸して皇
漢を輔⁴⁶け 節を尽して帝為⁴⁶を佐く 諫諍は曜軒の日 啓沃堯曦昭らかにす 淳化姫旦に
同じく 聖道仲尼に垂⁴⁷ぐ 羽林上將を為し 象岳台司を作る 風月は応に本主にして 経
籍即ち尊戸たり 抑⁴⁸も亦た衆芸に長じ 百中南皮を嘲ふ 博覧先世に伝わり 佳句百代に
知らる 春蛙気序無く 海岸に篩⁴⁹を出す如し 秋鴈行什を数へ 氷雪肌に在るに似たり
閑居して粧製を催し 騷人の辞自り深し 煙霞桃李の匂ひ 曹娥の碑に絶す 文章十二卷
併せて瓊璠の賞為り 後集三才を動かし 読者の涙漣涵たり 異日仙訣を化し 斯の処に
龍輻留まる 雲台宣年を奏し 民は考妣の慈しみに蒙⁵⁰し 爰に九泉の地を占ひ 長く万代
の祠を立つ 三廻して金冊を加へ 百行鼎彝に記す 朝使は鳳銜⁵¹を伝へ 玉藻前墀を飛ぶ
脛無くして来るが如くして 不待微風の吹くを待たず 青苔色紙の上 妙迹⁵²両韻の詩 伝
ふ門下に肩在ると 後人猶し窺ひ得たり 風人龍章を献じ 日夜尊儀を顕はす 吟詠閑か
に歩を引き 聴者嬖⁵³を垂る 又聞く紅燭燃ゆと 殆んど簾帷に及ばんと欲す 声有りて
暗きに人を喚び 既にして炎上の危ふきを免がる 昔南峯の僧有りて 入定して金姿⁵⁴を見
はす 大聖威徳天 昭臨して二麗⁵⁵に倅し 百万の猛霊を率ゐ 億千の靈祇に主す 皇居頻
りに火有りて 製造班垂⁴⁷を課す 虫卅一字に成り 板上其の詞を著す 夜々管弦の声
寥亮として座下の珎 時々蘭麝の香 芬芳として室中の胎 怪きこと宋宮の戸に同じく

⁴⁴ 左に方。

⁴⁵ てへんが付く。

⁴⁶ おんなへんが付く。

⁴⁷ にんべんが付く。

読むこと宣室の釐^{りん}に斉し 綿の山徒らに屐^{はきもの}を製^{つく}り 羅水未だ醜^のを歡まず 葉欄の石徒ら
に煎じ 仙竈^{せんそう}の玉空しく炊く 国内に疑獄有りて 真偽多疑に迷ふ 書理寺門を押し 一
旦妍嗤^{けんし}⁴⁸を弁^{わきま}ふ 紛を解き神軍を超えて 蒙を発し元龜を過ぐ 囚徒五刑を寛^{ひろ}げ 訟人百
罹を免がる 凶邪所を得る無く 自ら三不欺を兼ね 若し人詐偽する有らば 誅罰するに
豈に私有らむや 若し人隠伏する有らば 発揚するに更に遅きこと無し 懲^{きめう}咎^{とが}立ちて見る
べく 福禍坐して応に推すべし 鶯^{あう}鳥は鳥雀を駢^あけ 仁獸は狐狸を逐ふ 霜科^{しもり}は錙^{しん}銖^{しゆ}を決
し 露^{ろう}賊^{ぞく}は毫釐^りを弁^{わきま}ず 寒朝に参詣の輩 肩に駕^のり手は弓^ゆ⁴⁹を成す 暑月に精進の人 踵
を継ぎ足は疵を忘る 宴遊幾廻りを為し 篇翰各手に随ふ 早春菜羹に和し 初冬花壇を
残す 三日曲江の宴 七夕漢水の嬉 二季の勸学会 結縁素縑^しを極む 九秋念仏の筵 利
生僧祇を待つ 聖忌是れ何日ぞ 花と与に春期有り 仲秋二十五 齋会無虧に長し 樂懸
四時張し 琴瑟埙簫^{しつ}に和す 酒部七節立ち 流醴瓊^{れいけいし}卮^{うか}を泛ぶ 箏柱霞窓を吹き 歌塵雲桶
を動かす 簫管吹きて尽きず 曲長紅袖^{あま}羸^る 舞衣繽紛として翻り 宴罷^やみ燕姫を伏さす
堂塔皆櫛比し 三昧して月氏を伝ふ 常に大法鼓を撃ち 久しく伝灯の脂^{あぶら}を挑^ひぐ 無明妄
想^{まう}を蕩^{たう}ひ 夢後^{あつ}軋^あ維^いに驚く 仏は万徳の容を表し 僧は八字の眉を垂る 論議は常に往復
し 講説は自ら疇咨^{しゅうそ}す 龍象其の中に満ち 師跡陳隋を伝ふ 証入の位弥す深く 廻向の
志各の擣^ひむ 都邑其の下に成り 弓^ゆ⁵⁰屋^い柎^ふを連ぬ 城狐社鼠の喩 罪有りて鞭答を免ず
震居の西は北野 尊神広基を祐く 右近の馬場の辺 風景天為に任す 万乗鸞輿を廻らし
六軍龍旗を靡かす 羽客は鶴綾を曜かし 宮女は鳳綦を曳く 紫衫各の行事し 袞服方に
頤^{あご}を樹^たつ 林巒光輝を生じ 百王の鴻業^{おほ}丕^いなる 公家神事有りて 幣を奉じて先ず袞を

⁴⁸ くちへんなし。

⁴⁹ にくづきが付く。

⁵⁰ にんべんが付く。

祈る 晴るるを禱れば日皓々たり 沢を乞へば雨禱々たり 又吉祥院有りて 子午
の城離在り 孟冬十七日 八講法華披く 杏壇に柳市生じ 集会何れの堂に之かん 薦挙
して遂ぐるに無謬なり 禁制して敢へて隳らず 五畿及び七道 毎国祭祀して^つ51しむ
都慮四海の内 争ひて指搗を仰がず 天満自在の名 布護して尊卑を被る 神慮の擁護す
る所 枯楊忽ち莢を生ず 神徳の眷顧する所 洞池自ら漸を生ず 大いに菽麦に
飽くるを得 燕豈に蒺藜を食はむ 普天悉く截つ有り 率土誠に不羈なり 六十余州
を^{したが}傳へ 彼の八麩^びに返す 国富みて鳥糞を食ひ 民安んじて孫飴を含む 冥化傾欠少なく
神徳^{すく}禱ふ所多し 菜色上腴^うに満ち 花祖東甬⁵²に尽くす 余裔著姓を為し 青紫農義に^{つか}事
ふ 棘路^{きよく}夙夜^{しゆく}怠^{いそ}ぎて 蘭省^{らんしん}簪^{わと}帯^{おと}疲^せろふ 射^{せき}榮^{きく}十葉に及び 分符^{ぶんぷ}豈に一塵^{ちん}ならん 廊下往
事を鑑み 旧実尤も思ふべし 天を仰ぎて有道を恃み 善に与して^{めつむり}冥^{むら}りて^{われ}台を憐れむ
神に任せて更に倦むなく 福謙亦た誰に在らむ 和に乖きて身^{つつが}恙^が多く 節を抱きて年已に
耆ゆ 病に沈み歓娛寡く 政に臨みて忸怩多し 行年六十二盈ち 釐務事々に癡かなり
籙^{かぶ}を披^ひり露命をトひ 鏡に対して霜髭^ぬを抽く 脆質蒲柳に同じく 落景^{えん}崦嵫^しに及ぶ 題二
千字を適し 梧台の嗤^{わら}ひを招くを恐る

51 ころもへんが付く。

52 くさかんむりが付く。